

在華宣教師の洋学資料に見える三字語：蘭学資料との対照を兼ねて

著者	朱 京偉
雑誌名	国立国語研究所論集
号	1
ページ	93-112
発行年	2011-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000478

在華宣教師の洋学資料に見える三字語

——蘭学資料との対照を兼ねて——

朱 京偉

北京外国語大学

国立国語研究所 理論・構造研究系 客員教授 [-2010.10]

要旨

本稿は、先に発表した小論「蘭学資料の三字漢語についての考察——明治期の三字漢語とのつながりを求めて——」(朱 2011) の続編である。現代日中両国語では、三字語の語構成がほぼ同じで、同形語も数多く存在している。その背後に、どのような日中語彙交流の歩みがあったかを解明するのが、先の小論と本稿の目的である。

先の小論に続き、中国語側の三字語の状況を明らかにしようと思い、宣教師資料をとりあげたのであるが、日中双方の対照研究がしやすいように、蘭学資料の場合とほぼ同じ調査方法やデータの集計・分類方法を用いた。宣教師資料の三字語については、前部二字語基と後部一字語基に分けてそれぞれの性質を検討した上で、蘭学資料との比較対照を行なった。その結果、中国語では、近代以前から、少なくとも宣教師資料において、2+1型三字語の造語機能がすでに備わっていたこと、蘭学資料の三字語は、語構成パターンの面で中国語からの影響を受けながらも、後部一字語基の機能が強化され、同一語基による系列的・グループ的な三字語の創出へ進化を遂げたことなどを明らかにした。

キーワード: 三字漢語, 蘭学資料, 在華宣教師資料, 漢語の語構成, 日中語彙交流

1. 調査資料の選定

清朝初期から鎖国に入った中国は、アヘン戦争(1840-42)以後、列強から門戸開放が余儀なく迫られた。これに伴い、プロテスタント宣教師の中国進出がいよいよ本格化し、墨海書館と江南製造局の広方言館がそれぞれ1843年と1863年に設立されて、宣教師達による翻訳と出版が全盛期を迎える。在華宣教師による漢訳洋学書は、率先して西洋の科学知識を中国へ紹介したと同時に、伝統的な文言文の規範にとらわれない、白話文的要素の多い文体を使用したため、中国語の近代化において無視できない役割を果たした側面があると思われる。こうした出版物の中で、三字語はどのように使用されていたかを明らかにするために、刊行年、著訳者およびジャンルに配慮し、次の13種の資料を調査の対象として選定した¹。それぞれの資料から三字語を最大限に抽出した後、資料の刊行年次順にしたがい、重複の語を除いて、異なり語に整理した。

¹ このうち、資料入手の関係上、初版ではない和刻本も使用したが、中国の初版本を下敷きに使って復刻したもので、和訳などが加えられていないことは確認済みである。

表1 調査の対象資料と三字語の抽出語（異なり語数）

資料名	分野	総字数	抽出語	版本
1853《遐邇貫珍》麦都思編	雑誌	43.6万	220	香港英華書院印刷
1854《博物新編》合信著	自然科学	4.9万	52	明治5年(1872)江戸老皂館
1857《六合叢談》偉烈亜力編	雑誌	19.5万	189	上海墨海書館印
1858《内科新説》合信著	医学	5.4万	62	安政庚申(1860)天香堂蔵版
1864《万国公法》丁韞良訳	国際法	8.1万	22	慶応元年(1865)京都崇実館
1868《格物入門》丁韞良著	自然科学	7.9万	70	明治2年(1869)明親館蔵版
1876《格物探原》韋廉臣著	自然科学	10.6万	60	光緒2年(1876)活字板印
1887《電学須知》傅蘭雅著	電学	1.3万	40	未詳, 実藤文庫所蔵
1890《西国天学源流》王韜訳	天文学	1.9万	11	淞隱廬活字版
1890《重学浅説》王韜訳	力学	1.2万	25	光緒庚寅(1890)淞北逸民校刊
1894《全体須知》傅蘭雅著	医学	1.5万	96	未詳, 実藤文庫所蔵
1896《格致質学啓蒙》艾約瑟著	物理学	5.5万	67	上海著易堂書局発兌
1896《身理啓蒙》艾約瑟著	生理学	6.1万	65	上海著易堂書局発兌
		117.5万	979	

これに先立って、蘭学資料の三字漢語をとりあげた際に、1798-1857の間に出版された7種の蘭学著訳書を用いたが、表1と見合わせると、アヘン戦争後の在華宣教師の洋学資料は、最初の数年間は後期の蘭学資料と重なるものの、全体的には出版の時期が遅れていることがわかる。この時期の日中語彙の影響関係を考えるときに留意すべき点である。

2. 抽出語の概観

宣教師資料から抽出した三字語は、大きく2+1型と1+2型の二つのパターンに分けられる。細かく見れば、たとえば、「出入口、大小脳、動植物、黄赤道」などは、それぞれ「出口+入口→出入口」「大脳+小脳→大小脳」「動物+植物→動植物」「黄道+赤道→黄赤道」のようにできたもので、(1+1)+1型という別のパターンとして分類してもよさそうだが、語数が極端に少なく、生産性の強いパターンではないため、2+1型の中にも含めるようにした。また、三字語の内部構造を検討する目的で、その構成要素である二字語基と一字語基に対し、それぞれ、名詞性語基(N)・動詞性語基(V)・形容詞性語基(A)・接辞性語基(S)といった品詞性の情報を与えた。これに基づいて三字語の構成パターンを示すと、表2のようになる。

表2 二字語基と一字語基の品詞性および構成パターン

	N+N	V+N	A+N	N+V/S+V	S+N	合計
2+1型	488 (58.5)	315 (37.8)	31 (3.7)	0	0	834 (85.2)
1+2型	100 (69.0)	13 (8.9)	30 (20.7)	0	2 (1.4)	145 (14.8)
合計	588 (60.1)	328 (33.5)	61 (6.2)	0	2 (0.2)	979

() は %

表2の数値を、先に調査した蘭学資料の三字漢語の構成パターンと比べて、大きな相違が二つほどあげられる。一つは、蘭学資料では、N+N構造の語が48.6%を占めるのに対して、宣教師資料では、それが60.1%となり、11.5ポイントの差が見られる。これと引きかえ、V+N構造の語の比率は、蘭学資料では44.3%、宣教師資料では33.5%と、その差は10.8ポイントとなっている。つまり、蘭学資料では、N+N構造(48.6%)とV+N構造(44.3%)の三字語がほぼ変わらない比率で造語されているのに対して、宣教師資料では、N+N構造(60.1%)がV+N構造(33.5%)を大きく引き離して造語力の強さを見せている。もう一つは、宣教師資料では、2+1型の語の比率が全抽出語の85.2%となっており、蘭学資料の91.4%と比べて、6.2ポイントの差がある。換言すれば、宣教師資料では、1+2型の三字語が比較的多用されるということになる。それでも、2+1型の三字語は抽出語全体の8.5割を占めているので、以下ではこれを検討の対象にし、前部二字語基と後部一字語基の性質をそれぞれ検討していきたい。

3. 二字語基内部の結合関係

日中対照をしやすいように、先に調査した蘭学資料の場合と同じ方法で宣教師資料の三字語を整理した。漢字一字は基本的には意味と品詞性を持ち合わせた1語基となるが、語基が二つ結合して造られる二字漢語は、その前語基と後語基の間で、主述関係・修飾関係・並列関係・客述関係・述客関係といった結合関係(つまり統語構造)によって結ばれていると考えられる(野村1988)。このような観点に立ち、前部二字語基(834語)の内部構造については、次表のように種々のパターンに振り分けて、それぞれの語数と比率を記入した。

表3 二字語基内部の結合関係

二字語基の品詞性	内部の結合関係	語数 (%)	語例	蘭学資料での比率
名詞性語基 (N) 488語 (58.5%)	N+N 修飾関係	381 (45.7)	腸胃(病), 南極(圏)	35.6%
	A+N 連体修飾関係	59 (7.1)	粗質(物), 熱道(帯)	7.9%
	V+N 連体修飾関係	39 (4.7)	視力(率), 成衣(店)	4.1%
	S+N 連体修飾関係	3	無生(物), 無名(骨)	
	N+V 主述関係	3	官用(艇), 御用(所)	
	N+V 客述関係	3	海防(吏), 天算(家)	
動詞性語基 (V) 315語 (37.8%)	V+V 並列関係	77 (9.2)	寄生(枝), 集議(院)	25.7%
	V+N 述客関係	195 (23.4)	助力(器), 発光(物)	12.2%
	N+V 連用修飾関係	17 (2.0)	外用(法), 横截(面)	3.9%
	A+V 連用修飾関係	6	近視(眼), 平行(線)	
	M+V 連用修飾関係	12	自流(井), 主持(者)	
	S+V 連用修飾関係	3	所載(物), 被訟(者)	
	V+A 述補関係	5	顕微(鏡), 止痛(薬)	
形容詞性語基 (A) 31語 (3.7%)	A+A 並列関係	17 (2.0)	浅斜(肌), 貧苦(人)	3.5%
	N+A 主述関係	7	頭痛(病), 昼短(圏)	
	M+A 連用修飾関係	4	極楽(園), 最卑(点)	
	A+N 修飾関係	3	高度(機), 扁圓(球)	

表3の結果を、蘭学資料の前部二字語基の結合関係と比較すると、日中双方の特徴がよく見える。まず、宣教師資料と蘭学資料では、主要な結合関係がほぼ対応しており、一方にあって他にない結合関係は、語数の少ない少数のパターン（たとえば、N+V 客述関係、N+A 主述関係、M+A 連用修飾関係など）を除いて、ほとんど存在しない。つまり、中日双方の三字語がほぼ同様の語構成で成り立っていることがわかる。

また、「蘭学資料での比率」の欄で示したように、宣教師資料と蘭学資料の間で比率の差が見られるが、なかでも、差が10ポイントを超えた「N+N 修飾関係」「V+N 述客関係」および「V+V 並列関係」の3パターン（網掛け部分）がとくに注目される。具体的に言えば、蘭学資料に比べ、宣教師資料の前部二字語基には、「火+輪（車）、津+液（管）、蛋+形（石）、風+雨（針）」のような「N+N 修飾関係」、および、「吸+鉄（石）、出+口（貨）、発+電（瓶）、分+度（圏）」のような「V+N 述客関係」の二字語基が比較的多く見られる。これに対して、蘭学資料では、「含+漱（剤）、減+退（期）、刺+破（症）、発+生（期）、飽+和（点）」のような「V+V 並列関係」の二字語基が多用される傾向がある。このような傾向は、二字語基の造語力にも現れているので、次節であらためてとりあげたい。

4. 二字語基の造語力

対象とした834語の2+1型三字語について、前部二字語基がそれぞれどのぐらいの三字語を構成したかを調べ、その結果を表4にまとめた。たとえば、13種の宣教師資料では、「地理」によって「地理家、地理学、地理士、地理書」の4語が造語された場合、これを造語数4語の語基として数える。「地理」のほか、造語数4語の語基は「化学」「脳筋」など計8語見られたので、語基数の欄に「8」と記入しておく。同様に、造語数2語の二字語基は計71語あるので、語基数は「71」となる。

表4 前部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
21	1	玻璃（-杯、-法、-管、-罐、-鏡、-輪、-面、-片、-瓶、-器、-球、-体、-筒）
10	1	電気（-法、-機、-局、-力、-溜、-熱、-線、-学、-魚、-鐘）
8	1	吸鉄（-極、-力、-気、-器、-石、-性、-学、-針）
6	1	格致（-会、-家、-士、-学、-院、-者）
5	2	火輪（-車、-船、-機、-路、-器）、十字（-架、-教、-牌、-式、-形）
4	8	地理（-家、-士、-書、-学）、化学（-家、-力、-士、-書）、脳筋（-糸、-綯、-衣、-軸）、平円（-道、-法、-軌、-積）、三角（-法、-房、-肌、-形）、天文（-家、-鏡、-師、-士）、外国（-船、-法、-官、-人）、西洋（-船、-国、-人、-語）
3	14	博物（-士、-園、-院）、出口（-茶、-単、-貨）、伝教（-師、-士、-者）、発電（-瓶、-器、-筒）、放電（-叉、-桿、-鉗）、公局（-船、-所、-長）、金質（-鏡、-物、-線）、开方（-表、-法、-数）、上帝（-道、-国、-書）、泰西（-曆、-人、-字）、吸水（-管、-式、-筒）、引電（-板、-桿、-架）、英国（-法、-君、-主）、重学（-家、-理、-力）

2	71	白粉（-層，-質），半月（-戸，-門），鼻梁（-峰，-骨），赤道（-面，-図），杵臼（-節，-式），伝声（-管，-器），代数（-法，-術），蛋形，第二，地球，地平，第三，第一，癡狂，分度，風雨，福音，格物，寒暑，合衆，花旗，火薬，脊骨，紀事，節水，津液，進口，経緯，景教，立方，領事，流質，…
1	563	安楽（-窩），安息（-日），胞膜（-病），保単（-紙），北極（-圈），本分（-事），本性（-法），比例（-法），扁円（-球），弁論（-家），表散（-薬），冰糖，併力，泊船，博覧，博学，布改，布政，裁縫，漕糧，測電，測量，測驗，叉字，長老，長卵，腸胃，潮汐，車輪，成衣，赤血，抽筋，出入，…
(834)	662	(1語基あたりの平均造語数は約1.26語になる)

表4によると、「玻璃-」を前語基とする三字語は計21語あり、造語数が最も多い。その後、「電気」（10語）、「吸鉄」（8語）などと続くが、全体的には、造語数の多い二字語基が少ないのに対し、造語数1語だけの二字語基は563種もあって、全語基数の85%を占めている。そのため、1語基あたりの平均造語数はわずかに1.26語に過ぎない。ただし、三字語において前部二字語基の平均造語数が少ないのは、宣教師資料に限って見られる現象ではない。蘭学資料のそれが1.32語であったので、宣教師資料の場合とほぼ同様な結果となっている。

しかし、二字語基の中身を実際に調べてみると、やはり日中間で相違があることに気付く。たとえば、宣教師資料で、造語数2語以上の全99語基の品詞性を見てみると、名詞性語基 N=64語（64.7%）、動詞性語基 V=33語（33.3%）、形容詞性語基 A=2語（2.0%）のようになるが、蘭学資料における同範囲の107語基では、名詞性語基 N=47語（43.9%）、動詞性語基 V=55語（51.4%）、形容詞性語基 A=5語（4.7%）となっている。ここからも、表3で触れたように、宣教師資料では名詞性の二字語基が多く、蘭学資料では動詞性の二字語基が多いという傾向が見出される。以下では、实例に基づいて、その要因を検討してみたい。

4.1 名詞性二字語基の日中対照

宣教師資料で、前述の名詞性二字語基（N=64語）の結合関係を見れば、「西+洋（船）、博+物（院）、白+粉（質）」のようなA+N修飾関係の語が6語（9.4%）と、「化+学（力）、蒸+気（法）、植+物（学）」のようなV+N連体修飾関係の語が6語（9.4%）、および「火+薬（局）、牙+床（骨）、牛+乳（舗）」のようなN+N修飾関係の語が52語（81.2%）となっている。このうち、N+N修飾関係の語が8割以上を占め、最も多いことがわかる。その全用例を示すと、次の通りである。

宇宙（内） 英国（法） 火薬（局） 火輪（車） 花旗（国） 牙床（骨） 外国（船）
 寒暑（針） 牛乳（舗） 金質（鏡） 景教（師） 経緯（線） 公局（船） 三角（形）
 自然（銅） 十字（架） 重学（力） 杵臼（式） 上帝（道） 津液（管） 人字（式）
 水師（兵） 正肘（肌） 脊骨（柱） 千里（鏡） 他国（商） 泰西（曆） 第二（等）
 第三（等） 第一（等） 蛋形（石） 地球（図） 地平（面） 地理（学） 中国（語）
 天主（教） 天文（家） 電気（機） 頭顱（部） 日本（書） 日食（法） 脳筋（衣）
 玻璃（管） 半月（門） 鼻梁（峰） 風雨（針） 福音（書） 平円（道） 平方（根）
 牡線（体） 螺紋（骨） 立方（尺）

一方、蘭学資料において、同範囲の名詞性二字語基 (N=47 語) の結合関係に目を向けると、A+N 修飾関係の語が 8 語 (17.0%)、N+N 修飾関係の語が 33 語 (70.2%)、V+N 連体修飾関係の語が 5 語 (10.7%) のようになっている。この中で、N+N 修飾関係の語は、宣教師資料の同パターンと比べて、語数の比率に 10 ポイントほど差があり、注目に値する。その全用例は次の通りである。

硫黄 (酸) 円錐 (法) 回虫 (病) 角膜 (病) 間歇 (熱) 眼球 (癌) 眼瞼 (癌)
 癌瘡 (様) 金属 (器) 外科 (術) 形器 (機) 三角 (板) 酸素 (極) 硝子 (包)
神経 (病) 水精 (質) 水素 (極) 正方 (体) 舍密 (法) 先天 (翳) 纖維 (質)
速力 (矩) 第一 (種) 第三 (種) 第二 (種) 胆液 (管) 地球 (上) 腸胃 (熱)
 南極 (素) 乳糜 (管) 玻璃 (管) 皮膚 (病) 北極 (圈)

なぜ、宣教師資料の三字語には名詞性二字語基が多く、蘭学資料の三字語にはそれが少ないのか。上掲の双方の二字語基を比較してみると、宣教師資料では、「花旗、景教、杵臼」のように、日本語になじみにくいと思われる語 (下線) が目立っているが、これは、すなわち、日本語に比べて、中国語側の語基の種類がより豊富であることの現れとも受け止められる。これに対して、蘭学資料では、「角膜、眼球、酸素」など少数の語 (下線) を除いて、残りはすべて漢籍で出典が見出せる二字語となっている。つまり、蘭学者達にとって、二つの名詞性語基を結合させて二字漢語を造ることが難しく、漢籍からの借用にたよることが多かったと推察される。森岡 (1987: 208-209) はかつて「日本人による造語は、二字漢語の作成にはやや不自由があり、三字以上の漢語の場合に自由に大量の新語を誕生させたと思われる」と指摘したことがあるが、以上の日中対照からは、まさにその裏付けになるような結果が出ていると言える。

4.2 動詞性二字語基の日中対照

前述のように、動詞性二字語基となると、日中双方の語数と比率が逆転する。まず、宣教師資料において、動詞性二字語基 (V=33 語) の主な結合関係をあげると、V+N 述客関係の 24 語 (72.7%) と、V+V 並列関係の 8 語 (24.2%) がある。それぞれの全用例は次の通りである。

・宣教師資料にある V+N 述客関係の二字語基

印字 (館) 引電 (架) 開方 (表) 格物 (学) 合衆 (国) 紀事 (書) 吸水 (管)
 吸鉄 (石) 施医 (院) 指南 (針) 出口 (貨) 進口 (単) 折光 (角) 節水 (管)
 造物 (主) 代数 (法) 中風 (状) 転肘 (肌) 伝教 (師) 伝声 (管) 発電 (瓶)
 分度 (圈) 放電 (叉) 領事 (官)

・宣教師資料にある V+V 並列関係の二字語基

運動 (髓) 格致 (会) 屈伸 (節) 死傷 (者) 舒縮 (力) 巡理 (庁) 癡狂 (院)
 貿易 (行)

これに対して、蘭学資料では、動詞性二字語基 (V=55 語) の主な結合関係として、V+N 述客関係の 11 語 (20%) と、V+V 並列関係の 39 語 (70.9%) が見られる。その全用例は次の通りである。

・蘭学資料にある V+N 述客関係の二字語基

結核（労） 驗温（器） 施術（後） 消食（機） 脱液（症） 排気（鐘） 排邪（機）
 発焔（法） 発汗（剂） 避雷（器） 離心（幕）

・蘭学資料にある V+V 並列関係の二字語基

解剖（学） 合併（病） 感应（力） 感受（機） 感染（部） 揮発（鹼） 吸収（孔）
 虚脱（症） 焮衝（病） 経験（学） 痙攣（症） 交感（機） 刺衝（物） 滋養（法）
 集合（点） 衝動（剂） 蒸発（気） 蒸餾（器） 生殖（力） 遷延（病） 注射（薬）
 鎮痙（剂） 滴流（態） 伝染（病） 反射（点） 腐蝕（法） 腐敗（物） 分合（機）
 分析（法） 分泌（器） 補給（機） 防焮（剂） 防腐（薬） 麻醉（性） 麻痺（症）
 輸送（力） 予防（法） 流行（症） 流動（体）

このように、蘭学資料にある動詞性二字語基の総数が宣教師資料のそれを上回っていると同時に、日中間で、V+N 述客関係の語と V+V 並列関係の語は比率が逆転するような形で現れている。この事実は次のように解釈できる。V+N 述客関係は、とくに日本語と比較した場合、典型的な中国語の統語構造といえる。これに倣って和製漢語が造られることもあるが、前掲の蘭学資料の 11 語に関しては、いずれも漢籍で出典が見出せるものである。日本語固有の造語パターンではないため、V+N 述客関係の二字語基が宣教師資料に多く、蘭学資料に少ないのはむしろ自然なことと思われる。

また、蘭学資料に V+V 並列関係の二字語基が多いことについては、日本語には昔から V+V 型の和語複合動詞（「持ち上げる、書き終わる」の類）が多く存在していた。そのため、V+V 並列関係の二字漢語に対してなじみやすいというか、訓読みを介して理解可能な二字語であれば、なおさら受容されやすいと思われる。

一方、中国語側の要因として、N+N 修飾関係などの名詞性二字語に比べて、V+V 並列関係の動詞性二字語が、構造助詞“之”を伴わずに、後続の名詞を修飾する形で語を構成することに対して抵抗があったように思われる。清末までの中国語では、“解剖学、合併病”のかわりに“解剖之学、合併之病”のように表現されるのが普通であった。なぜ、動詞性二字語が三字語の前語基になりにくいかを説明する必要があるが、これは今後の課題としたい。

5. 二字語基の出典状況

蘭学資料の三字漢語をとりあげた際、それぞれの語が蘭学者による造語か、それとも、それ以前の漢籍で出典が見出せるかを調べることは、蘭学資料の三字語の性質を解明するための重要なポイントの一つである。そのため、724 の前部二字語基を対象に、《四庫全書》（電子版）によって一語一語の出自状況を検索し、その結果に基づいて、「3 字出典あり」= 95 語（13.1%）、「2 字出典あり」= 468 語（64.7%）、「2 字新義あり」= 11 語（1.5%）、「2 字出典なし」= 150 語（20.7%）という四つのパターンに分類した²。

² 蘭学資料における「3 字出典あり」「2 字出典あり」「2 字新義あり」および「2 字出典なし」といった三字

宣教師資料の三字語の場合は、中国語に対する日本語からの影響がまだなかった 19 世紀後半であるから、基本的には中国語内部の語彙問題になるが、これらの三字語が在来語の踏襲なのか宣教師達の新造語なのかを見分けることはやはり必要である。そのため、蘭学資料と同じ方法で、834 の前部二字語基についての出典状況を調べたところ、表 5 の結果を得た。

表 5 前部二字語基の出典状況

資料名	3 字出典あり	2 字出典あり	2 字出典なし	資料別合計
1853 《遐邇貫珍》 麦都思編	67 (28.8)	110 (23.2)	18 (14.2)	195 (23.4)
1854 《博物新編》 合信著	9 (3.9)	24 (5.1)	7 (5.5)	40 (4.8)
1857 《六合叢談》 偉烈重力編	66 (28.3)	102 (21.5)	20 (15.7)	188 (22.5)
1858 《内科新説》 合信著	27 (11.6)	26 (5.5)	4 (3.2)	57 (6.8)
1864 《万国公法》 丁韪良訳	8 (3.4)	10 (2.1)	2 (1.6)	20 (2.4)
1868 《格物入門》 丁韪良著	14 (6.0)	28 (5.9)	14 (11.0)	56 (6.7)
1876 《格物探原》 韋廉臣著	14 (6.0)	29 (6.1)	10 (7.9)	53 (6.4)
1887 《電学須知》 傅蘭雅著	2 (0.9)	13 (2.7)	19 (15.0)	34 (4.1)
1890 《西国天学源流》 王韜訳	5 (2.1)	4 (0.8)	1 (0.8)	10 (1.2)
1890 《重学浅説》 王韜訳	3 (1.3)	6 (1.3)	0	9 (1.1)
1894 《全体須知》 傅蘭雅著	10 (4.3)	43 (9.1)	13 (10.2)	66 (7.9)
1896 《格致質学啓蒙》 艾約瑟著	4 (1.7)	41 (8.7)	12 (9.4)	57 (6.8)
1896 《身理啓蒙》 艾約瑟著	4 (1.7)	38 (8.0)	7 (5.5)	49 (5.9)
出典有無の合計	233 (27.9)	474 (56.9)	127 (15.2)	834
蘭学資料での比率	(13.1)	(64.7)	(20.7)	724

() 内は %

まず、各資料の項目ごとの比率と「資料別合計」欄で示した当該資料の抽出語の占める比率を比較することによって、抽出語の分布状況をとらえることができる。たとえば、表 5 によると、《遐邇貫珍》《六合叢談》《内科新説》の 3 資料では、「3 字出典あり」の語は当該資料の抽出語の占める比率を上回っているため（網掛けの部分）、ほかの資料よりも比較的多く使われていると思われる。これと同様に、《全体須知》《格致質学啓蒙》《身理啓蒙》の 3 資料における「2 字出典あり」の語も、《格物入門》《電学須知》《全体須知》《格致質学啓蒙》の 4 資料における「2 字出典なし」の語も、それぞれ、当該資料の抽出語の占める比率を上回っていることから（網掛けの部分）、ほかの資料よりも多用される傾向があると指摘できる。ただし、その格差はさほど目立ったものではなく、在来語と新造語のどちらか一方に極端に偏るようなことは見られない。

また、表 5 の結果を蘭学資料の数値（前掲）と比較すると、宣教師資料では、「3 字出典あり」の語の占める比率が 27.9% となっているが、これは蘭学資料の同種語の 13.1% に比べ、14.8 ポイントの差がある。一方、「2 字出典あり」と「2 字出典なし」の語の比率は、蘭学資料のそれらに比べて、それぞれ、7.8 ポイントと 5.5 ポイントの差がある。日中双方の資料を並べてみた場合、

語の分類については、朱（2011）を参照。

この差はなにを意味するのか。以下では、項目ごとに検討してみたい。

5.1 「3字出典あり」の語

宣教師資料にある「3字出典あり」の語とは、それまでの漢籍において同形の用例が見られるもので、在来語の踏襲ということになる。たとえば、「礼拝堂」という語は、《遐邇貫珍》(1853, 第3号)で、“百年前復改定和約, 議准俄人於都中建造寓館礼拝堂一所。”(百年前再び和約を改定し, ロシア人に市内の一ヶ所で会館と礼拝堂の建造を許可するのを議決した)のように使われている。しかし、《四庫全書》で調べてみると、《太平広記》(李昉ら撰, 978), 《嶺外代答》(周去非撰, 1178), 《諸藩誌》(趙汝適撰, 1225)などをはじめ, 宋代の書物にはすでに同形の用例があったので, 19世紀後半の宣教師資料にある「礼拝堂」は, 在来語の踏襲と考えられる。また、「救生船」は、《格物入門》(卷一)には、“西国沿海等处, 設有救生船, 其首尾均置鉄箱……”(西洋諸国の海岸沿いには, 救生船が設けられ, 其の首尾に鉄の箱が置かれている)とあるが, より早い用例を《四庫全書》で調べてみると、《江南通志》(1684), 《大清会典》(1684), 《江西通志》(1720)といった清代初期の書物に同形の三字語が見られ、「3字出典あり」の語と認定できる。

「3字出典あり」の語を通して、ある程度、近代以前の三字語の状況をかいま見ることができる。《四庫全書》で見付かった用例の出典を見ると、唐代(7-10世紀)以前の典籍がほとんどなく、宋・元(10世紀)以後から用例がしだいに増えて、明・清(14世紀)以後の出典を持つ三字語が大半を占めている感がある。これを踏まえて、中国語では、唐代以後、一字語中心から二字語中心への語彙体系の移行や白話文の出現に伴って、三字語が徐々に登場し、明・清以後になると、その数が一定のレベルに達したことが推察される。ちなみに、「3字出典あり」の語において、後部一字語基の使用状況を調べてみると、造語数の比較的多い□□+表, □□+法, □□+官, □□+鏡, □□+家, □□+圈, □□+線, □□+形などで構成された三字語は、ほとんど例外なく、明・清以後の典籍に出ている。つまり、三字語の増加にしたがって、共通する後部一字語基を持つ三字語のグループも見え始めたようである。

また、宣教師資料では、「3字出典あり」の語が233語見られ、抽出語全体の27.9%を占めているが、これは蘭学資料の同種語の13.1%を大幅に上回っている。つまり、宣教師資料では、当然のことではあるが、より多くの漢籍語が直接取り入れられている。この種の語には次のようなものがある。

宇宙内	遠近説	牙床骨	开方数	外治法	活字版	寄生枝	救生船	吸鉄石
近視眼	工夫茶	経緯度	顕微鏡	降生地	極楽園	三角形	止痛薬	指南針
自鳴鐘	自来火	車輪砲	十字架	上半身	植物類	食叶虫	頭痛証	西洋人
赤道図	象牙器	造物主	楕圓式	対数表	体性論	第二種	地稅銀	地平線
地平面	地方官	地理学	地理書	治安策	中国語	中心点	中風状	天学家
天主教	天主堂	天王星	動植物	日食法	玻璃管	泊船処	博物士	布政使
返照光	北極圈	有識者	羊角風	六面体				

5.2 「2字出典あり」の語

「2字出典あり」の語とは、それ以前の漢籍において、三字語の用例はないが、前部二字語基と同形の用例が見られるものである。表5でわかるように、「2字出典あり」に属するものが二字語基全体の半数以上を占め、最も多い。このことから、「二字の在来語＋一字語」の形で三字語を構成するのが最もよく用いられた方法だといえよう。この場合、前部二字語基が在来語の踏襲にあたる部分であるが、後部一字語基と結合してできた三字語は、在華宣教師達による新造語と言うべきである。

たとえば、清末の宣教師資料を見ると、艾約瑟 (J. Edkins) 著《格致質学啓蒙》(1896, 第二章) には、“於地球吸引力，並各物諸質点互相連合力之外，猶有化学中所言異性物之相合力”（地球の吸引力，並びに種々の物の諸質点における互いの連合力の外，なお，化学で言う異性物の相合力がある）のように、「吸引力」が使われている。しかし，《四庫全書》を調べてみると、たとえば，《濟生方》(宋・嚴用和撰，1253) には，“夫鼻者肺之候職，欲常和，和則吸引香臭矣”（鼻とは肺の脇役で，常に和を欲す。和ならば則ち香気と臭気を嗅ぎ付ける）のように、「吸引」の用例が見られるものの，三字語の「吸引力」はどの文献にも見当たらない。

また，偉烈亜力・王韜共訳《西国天学源流》(1890) では“以火星表為牢囚禁之，以諸方程式為鉄索，鎖其項而繫之”（火星表を牢屋として之を監禁し，種々の方程式を鉄の鎖として其の首を絞め，之を繋げる）のように、「方程式」が使われているが，《四庫全書》には，同形の三字語がなく，二字語の「方程」だけが見られる。一例をあげると，たとえば，《歷算全書》(清・梅文鼎撰，18世紀初) には“方程命名之義，方者比方也，程者法程也。”〈方程論發凡〉(方程を命名する意といえ，方は比方(たとえ)の方で，程は法程(法則)の程である)とある。このような場合の「吸引」や「方程」は，本稿でいう「2字出典あり」の語にあたる。その例として次の諸語があげられる。

印字(館) 演劇(所) 横截(面) 火輪(機) 火輪(船) 夏至(点) 灰石(層)
 開胃(薬) 角度(器) 格致(会) 合衆(律) 寄信(費) 戯劇(本) 吸水(管)
 吸鉄(学) 曲肱(状) 金質(物) 結氷(度) 牽引(力) 三角(肌) 三角(法)
 死傷(人) 煮飯(器) 瀉心(剂) 手掌(骨) 主謀(人) 聚光(点) 重学(家)
 重心(点) 出口(貨) 掌管(処) 蒸氣(機) 蒸氣(法) 食管(肌) 食蟻(族)
 津液(核) 新聞(紙) 人字(式) 数理(学) 西学(説) 脆骨(料) 赤道(面)
 石灰(質) 尖錐(形) 選挙(院) 相倚(式) 足骨(論) 打鉄(舗) 大公(会)
 蛋白(質) 地心(力) 地質(家) 抽氣(筒) 長老(院) 天文(鏡) 頭骨(部)
 日食(表) 玻璃(体) 煤氣(灯) 白粉(層) 飛鼠(族) 微糸(管) 風雨(表)
 沸水(点) 分影(鏡) 文房(店) 并力(線) 拋物(線) 無生(物) 有孔(形)
 郵政(局) 予言(者) 揚聲(筒) 離心(力) 領事(官)

5.3 「2字出典なし」の語

「2字出典なし」の語とは、それ以前の漢籍において、三字語の語形も前部二字語基と同形の用例も見当たらないものである。この種の二字語基は、語数（127語、15.2%）がそれほど多くないが、これらを含む三字語とともに、宣教師達によって造語された可能性が大きいと思われる。この中で、当時、画期的な発明が相次いだ電気関係の二字語基とこれらを含む三字語がとくに注目される。

隔電（櫂） 乾電（機） 顕電（擺） 接電（台） 阻電（料） 増電（蓋） 測電（器）
 探電（器） 蓄電（瓶） 電学（家） 電報（処） 電理（機） 防雷（鉄） 摩電（器）
 容電（体） 引電（架・桿・板） 電気（学・機・魚・局・鐘・線・熱・法・溜・力）
 発電（器・筒・瓶） 放電（桿・鉗・叉）

このほか、「光学（理）、光行（速）、光質（学）、撮景（鏡）、折光（角）、折光（度）」といった光学関係の用語や、「泳気（鐘）、気機（筒）、汽機（力）、蒸汽（器・機）」などの蒸気機関関係の用語、および「化学（家・士・書・力）」などの化学関係の用語も比較的多く、二字語の創出がこういった専門用語に集中していることがうかがえる。

また、語構成の面から見ると、「3字出典あり」や「2字出典あり」に比べて、「2字出典なし」の二字語基では、とくにV+N構造の語の比率が高くなっていることが調査から明らかになった。その大半は、「測電（器）、撤気（筒）、代数（法）、定北（針）」のようなV+N述客関係の二字語であるが、「抵力（線）、化学（家）、流質（物）、視力（率）、養汁（管）」といったV+N連体修飾関係の二字語も3割ほどを占めている。

6. 一字語基の造語力

後部一字語基の造語力については、前部二字語基と比較するほかに、とりわけ蘭学資料の一字語基との比較対照によって、日中間の造語力の相違をとらえる必要がある。そのため、蘭学資料の場合と同じ方法でデータをまとめ、表6のように整理した。

表6 後部一字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
45	1	骨（耳門-、手腕-、牙床-、脊背-、肩胛-、螺紋-、舌根-、鎖柱-、鼻梁-）
28-20	6	力（電気-、化学-、離心-、吸鉄-）、者（当事-、居住-、旁観-、有識-）、管（玻璃-、回血-、吸水-、毛孔-）、法（比例-、代数-、外国-、英国-）、表（対数-、風雨-、火星-、人物-）、人（他国-、西洋-、異邦-、中年-）
18-10	12	物（定質-、無生-、異性-）、点（冬至-、沸水-、中心-）、家（辯論-、地理-、天文-）、式（方程-、屈伸-、十字-）、器（測電-、角度-、助力-）、鏡（撮景-、天文-、顕微-）、形（人字-、三角-、圓球-）、院（博物-、集議-、選挙-）、筒（收電-、吸水-、圧気-）、肌（三角-、舒縮-、胸舌-）、線（地平-、対角-、拋物-）、機（電気-、乾電-、蒸気-）

9-5	33	面 (地平-, 横截-), 士 (博物-, 地理-), 学 (地理-, 植物-), 官 (地方-, 領事-), 粟 (開胃-, 止痛-), 層 (白粉-, 上新-), 船 (火輪-, 救生-), 房 (司事-, 左上-), 局 (軍械-, 印字-), 病 (腸胃-, 頭痛-), 会 (法師-, 格致-), 理 (流質-, 重学-), 論 (体性-, 運行-), 舖 (打鉄-, 牛乳-), 圈 (北極-, 昼短-), 書 (地理-, 西国-), 体 (六面-, 容電-), 針 (寒暑-, 指南-), 證 (肺病-, 傷風-), 質 (蛋白-, 石灰-), 処 (電報-, 掌管-), 店 (裁縫-, 文房-), 度 (斜角-, 折光-), 国 (合衆-, 西洋-), 核 (軟質-, 舌下-), 教 (回回-, 天主-), 節 (屈伸-, 無動-), 筋 (腦氣-, 微動-), 气 (炭養-, 天空-), 所 (演劇-, 御用-), 囿 (赤道-, 月球-), 主 (救世-, 造物-), 族 (飛鼠-, 食蟻-)
4-2	74	部 (頭骨-), 帶 (北寒-), 单 (出口-), 風 (通商-), 桿 (放電-), 館 (印字-), 球 (輕氣-), 熱 (電氣-), 石 (化形-), 数 (有窮-), 銀 (費用-), 種 (第二-), 状 (中風-), 道 (平圓-), 灯 (射影-), 等 (第三-), 地 (降生-), …
1	90	版 (活字-), 杯 (玻璃-), 兵 (水師-), 簿 (測量-), 策 (治安-), 腸 (大小-), 党 (両家-), 費 (寄信-), 府 (巡理-), 根 (平方-), 缶 (玻璃-), 軌 (平圓-), 海 (地中-), 行 (貿易-), 弧 (分度-), 極 (吸鉄-), 剂 (瀉心-), …
(834)	216	(1 語基あたりの平均造語数は, 約 3.86 語になる)

表6によると、後部一字語基の平均造語数が3.86語となっている。これは、前部二字語基の平均造語数1.26語(表4)に比べてやや多い程度で、蘭学資料の後部一字語基の平均造語数の7語と比較すれば、日中間に顕著な差が見られる。詳しく見ていくと、蘭学資料では、造語数56-37語の一字語基が4語あるのに対して、宣教師資料では、最も多い造語数が45語で、しかも1語基だけにとどまる。また、蘭学資料では、造語数5語以上の一字語基が全語基数の34.0%(35語)、造語数5語以下の一字語基が66.0%(68語)をそれぞれ占めているが、宣教師資料では、造語数5語以上の一字語基が24.1%(52語)、造語数5語以下の一字語基が75.9%(164語)を占めている。つまり、蘭学資料では、造語数の多い一字語基の比率が比較的高く、造語数の少ない一字語基の比率が相対的に低いのに対して、宣教師資料では、造語数の多い一字語基の比率が低く、造語数の少ない一字語基の比率が高くなっている。これは、全体の平均造語数が低く抑えられた要因の一つでもある。

このように、宣教師資料の後部一字語基は語基数が216種もあって、蘭学資料の103種を倍以上も上回っているが、平均造語数がわずかに3.86語で、蘭学資料の7語に比べて、半分にも及ばない。このことから、語基の種類が多くて平均造語数が少ないことがわかる。これに対して、蘭学資料の後部一字語基は、比較的少ない種類で、より多くの三字語を造り出している。明治以後、蘭学の時代から受け継がれたこのような語構成的特徴がいつそういかされるようになり、同じ後部一字語基を持つ三字語のグループが新造語の中で重要な位置を占めている。

7. 前語基と後語基の日中対照

以上、宣教師資料の三字語を検討しながら、蘭学資料の三字語との比較も行ってきた。ここでは、あらためて、日中対照の視点からデータをまとめておきたい。まず、蘭学資料と宣教師資料から抽出した2+1型三字語を、前部二字語基と後部一字語基(いずれも異なり語基数)に二分し、さらに、日中双方の照合によって、「日本資料のみ」「日中共通」「中国資料のみ」の3パターンに振り分けて、表7のような結果を得た。

表7 2+1型三字語における前語基と後語基の日中対照

	前部二字語基	後部一字語基
日本資料のみ	神経-, 分析-, 腐敗-, 揮発-, 自然-, 胆液-, 痙攣-, 流動-, 酸化-, 焮衝-, 形器-, 粘液-, 伝染-, 刺衝-, 反射-, 感染-, 回虫-, 角膜-, 可燃-, 流行-, 凝固-, 遷延-, 乳糜-, 舍密-, 生殖-, 酸素-, 蒸発-, 蒸餾-, 癌瘡-, 間歇-, 金属-, 水精-, 水素-, 速力-, 外科-, 纖維-, 硝子-, 眼球-, 創傷-, 避雷-, 結核-, 施術-, 脱液-, 消食-, … 500語 (91.2%) 造語数の多い順に例示	【抽象系】 -症, -期, -品, -上, -中, -浴, -系, -動, -毒, -徑, -勞, -霧, -酸, -痛, -様, -癌, -創, -精, -素, -腫, -臭, -叢, -的, -方, -後, -積, -級, -矩, -脈, -派, -態, -天, -下, -製, -子。(35語, 68.6%) 【実物系】 -翳, -宮, -液, -膏, -塩, -痘, -計, -癭, -包, -規, -花, -嶮, -囊, -鉛, -山, -腺。(16語, 31.4%) 51語 (49.5%)
日中共通	硫黄-, 腸胃-, 外用-, 気管-, 虚弱-, 近視-, 夏至-, 牽引-, 顕微-, 恒星-, 三角-, 自然-, 止痛-, 視学-, 自鳴-, 斜角-, 斜方-, 重心-, 象限-, 蒸気-, 植物-, 尋常-, 赤道-, 石灰-, 千里-, 造化-, 造物-, 測量-, 太陽-, 対角-, 第一-, 第三-, 第二-, 地球-, 地平-, 中心-, 天学-, 冬至-, 動物-, 南極-, 玻璃-, 発光-, 発汗-, 平行-, 北極-, 膀胱-, 離心-, 立方-。 48語 (日 8.8% / 中 7.3%)	【抽象系】 -病, -部, -尺, -点, -度, -法, -機, -極, -剂, -家, -角, -界, -力, -面, -内, -気, -圈, -熱, -術, -説, -体, -物, -形, -性, -学, -証, -質, -種, -主, -状。(30語, 57.7%) 【実物系】 -板, -車, -船, -骨, -管, -筋, -鏡, -孔, -輪, -膜, -器, -球, -水, -髓, -鉄, -銅, -線, -眼, -葉, -油, -鐘, -柱。(22語, 42.3%) 52語 (日 50.5% / 中 24.1%)
中国資料のみ	電気-, 吸鉄-, 格致-, 火輪-, 十字-, 地理-, 化学-, 脳筋-, 平円-, 天文-, 外国-, 西洋-, 博物-, 出口-, 伝教-, 発電-, 放電-, 公局-, 金質-, 开方-, 上帝-, 泰西-, 吸水-, 引電-, 重学-, 伝声-, 代数-, 蛋形-, 定質-, 流質-, 蒸汽-, 水沸-, 代数-, 分度-, 格物-, 節水-, 進口-, 経緯-, 領事-, 流質-, 貿易-, 牛乳-, 平方-, 日食-, 施医-, 舒縮-, 死傷-, 他国-, 天主-, … 614語 (92.7%) 造語数の多い順に例示	【抽象系】 -式, -士, -層, -会, -理, -论, -処, -教, -族, -带, -道, -風, -数, -等, -類, -脹, -积, -律, -事, -支, -策, -党, -費, … (39語, 23.8%) 【実物系】 -者, -表, -人, -院, -筒, -肌, -官, -房, -局, -舖, -書, -針, -店, -国, -核, -節, -所, -囚, -单, -桿, -館, -石, -銀, -灯, -地, -粉, -蓋, -口, -料, -皮, -瓶, -艇, -师, -紙, -軸, -本, -布, … (125語, 76.5%) 164語 (75.9%) 造語数の多い順に例示

以下では、表7の枠組みにしたがい、前部二字語基と後部一字語基の二つの側面から説明していきたい。

7.1 前部二字語基の日中対照

7.1.1 日中共通に見られる二字語基

この種の語は、それぞれ、蘭学資料の二字語基(548語)の8.8%と、宣教師資料の二字語基(662語)の7.3%を占めていることから、日中間で共通に用いられた二字語基がかなり少ないことがわかる。48語の中には、前部二字語基だけでなく、三字語までが日中共通となっている、いわゆる「3字出典あり」の語に属する「近視眼、顕微鏡、自鳴鐘、植物学、石灰質、千里鏡、造物主、対角線、天学家、玻璃管、北極圈」などの11語が含まれている。これらの三字語は、ほとんど明・清以後の漢籍や在華宣教師の漢訳洋学書に由来したものと思われるが、「植物学」だけが違うようである。これまでに、「植物学」は、在華宣教師の洋学書《植物学》(韋廉臣、艾約瑟、李善蘭共訳、

1858)の書名に発端した語とされてきた。しかし、今回の調査で蘭学書の『理学提要』(広瀬元恭訳、1852)には次の用例が見付かったので、和製漢語の可能性が高くなった。

此ノ書唯其ノ大略ヲ挙ク。若キハ花葉、根莖ヲ剖別、各異ノ官能ヲ辨析スルカ、則チ別ニ植物学有リ、此ノ学之(ノ)講スル所ニ非ズ也。(卷三、二十裏)

上掲の11語を除いたほかの二字語基は、たとえば、「(中)地平面／(日)地平線」「(中)発光物／(日)発光体」のように、中日双方の資料で別々の一字語基と結合して三字語を造っているが、『四庫全書』で検索した結果、いずれも明・清以後の漢籍にその用例が見られるものであった。

7.1.2 日本資料のみに見られる二字語基

「日本資料のみ」とは、三字語の前部二字語基として、蘭学資料にあって、宣教師資料に見当たらないものである。ただし、この種の語は、たまたま宣教師資料に使われなかっただけで、『四庫全書』で調べてみると、むしろ、古い出典を持つ漢籍語の数が和製語を圧して約8割を占めていることがわかる。500語の内訳とその語例は次の通りである。

a. 「3字出典あり」の語 (51語, 10.2%)

階級法 合併病 感応力 灌腸法 巨蟹宮 健胃薬 産科家 磁石力 出心線
清涼剂 尖瓣体 多血症 大気中 長斜方 等辺面 熱性薬 白羊宮 麦粉状
発熱期 半径線 半円状 皮膚病 婦人病 宝瓶宮 力芸学

b. 「2字出典あり」の語 (331語, 66.2%)

可燃(体) 解剖(学) 回虫(病) 間歇(熱) 感染(部) 吸收(孔) 虚脱(症)
凝固(体) 形器(機) 結核(労) 酸化(鉛) 刺衝(物) 集合(点) 蒸餾(器)
生殖(力) 胆液(管) 伝染(病) 内服(剂) 反射(点) 腐敗(物) 分析(法)
分泌(器) 避雷(器) 補給(機) 輸送(力) 流行(症) 流動(体)

c. 「2字出典なし」の語 (112語, 22.4%)

遠心(力) 甲状(腺) 過敏(証) 壊血(病) 角膜(病) 眼球(癌) 癌毒(症)
求心(力) 胸水(病) 痙攣(症) 結晶(水) 元素(酸) 射精(管) 触覚(機)
神経(病) 水素(極) 繊維(質) 単純(熱) 炭素(極) 炭酸(気) 地核(質)
粘液(労) 排泄(物) 冰点(下) 雰围(気) 飽和(点) 防腐(薬) 麻醉(性)
慢性(病) 無機(体) 網膜(上) 輸精(管) 輸尿(管) 有機(体) 硫酸(鉄)

d. 「2字新義あり」の語 (6語, 1.2%)

揮発(鹼) 金属(器) 真空(中) 生理(学) 普通(力) 分子(精)

上掲4項のうち、a, bに属する語は、語源的には、蘭学資料より時期が早かった明・清頃の漢籍やカトリック宣教師の漢訳洋学書に出典を持つものが相当多いが、この両者で7割以上の高い比率を占めていることから、蘭学資料の用語が中国資料の影響を強く受けていた側面がうかがえる。一方、中国語からの借用がうまくいかない場合は、蘭学者達が自ら新語を創出することも

少なくなかった。c, dに属する二字語は、蘭学者達によって造られたか、または、新義に転用されたものであり、「日本資料のみ」の二字語基で2割強を占めている。

7.1.3 中国資料のみに見られる二字語基

「中国資料のみ」とは、三字語の前部二字語基として、宣教師資料にあつて、蘭学資料に見当たらないものを意味するが、「化学、電気、電報、発電／十字架、地理学」などの語も含まれていて、必ずしも日本語で使われない語とは限らない。この種の語を《四庫全書》で検索し、その結果に基づいて次のように振り分けた。

a. 「3字出典あり」の語 (155語, 25.2%)

宇宙内 牙床骨 格物学 吸鉄石 経緯線 指南針 十字架 西洋船 創作者
 測驗法 大腿骨 地稅銀 地方官 地理学 中国語 中風状 天主教 天文家
 伝教師 当事者 頭痛病 日食法 泊船処 比例法 平方根

b. 「2字出典あり」の語 (361語, 58.8%)

印字(館) 花旗(国) 吸水(管) 牛乳(舗) 屈伸(節) 施医(院) 重学(力)
 巡理(庁) 舒縮(力) 進口(單) 津液(管) 人字(式) 水沸(点) 節水(管)
 泰西(曆) 定質(類) 白粉(質) 風雨(針) 分度(圈) 貿易(行) 領事(官)

c. 「2字出典なし」の語 (98語, 16.0%)

引電(架) 化学(力) 角質(式) 乾電(機) 光質(学) 撮景(鏡) 視力(率)
 蒸汽(器) 滲濾(性) 水遷(層) 声管(蓋) 折光(角) 速率(力) 測電(器)
 代数(法) 抽項(銀) 低度(機) 抵力(線) 電学(家) 電気(機) 電報(処)
 軟質(核) 入涙(管) 熱道(帶) 発電(瓶) 分微(器) 保单(紙) 放電(叉)
 防雷(鉄) 脈管(口) 黙示(録) 容電(体) 流質(理) 老花(眼)

このうち、a, bに属する語は、古い時代の漢籍からというよりも、明・清以降の比較的新しい漢籍やカトリック宣教師の漢訳洋学書に由来するものが大半を占めていると見られる。aとbを合わせて、この種の語の8割を超えているところから見ると、筆者が調査したアヘン戦争以後来華のプロテスタント宣教師資料では、明末清初頃に来華したカトリック宣教師達の用語が数多く取り入れられていることがわかる。一方、cに属する語は、19世紀半ばまでの漢籍やカトリック宣教師の漢訳洋学書には見当たらず、プロテスタント宣教師の著訳書において新たに造られた二字語と考えられる。

以上をまとめると、明末清初頃(16世紀末から18世紀初期にかけて)来華したカトリック宣教師達が医学関係の漢訳洋学書を出版しなかったこともあつて、蘭学者達は和蘭医学書の翻訳を通して、漢方医学書の用語と和蘭医学書の知識を融合させて蘭学独自の医学用語を生み出していた。一方、物理学・博物学関係の分野では、蘭学資料もプロテスタント宣教師資料も、ともにカトリック宣教師の漢訳洋学書に影響されたものの、日中間に直接の交渉がなかったため、「日中共通」の三字語は勿論のこと、二字語基の共通度もかなり低い。双方の「3字出典あり」の語を

見ても、別々の三字語が取り入れられている状況がわかる。

「日本資料のみ」の二字語基では、「2字出典なし」の語が2割以上を占めているのが注目される。この比率は、宣教師資料にある同種語の16.0%を上回っており、蘭学者達が新造語の創出に前向きに取り組んでいた姿勢がうかがえる。この中には、現代日本語に受け継がれただけでなく、借用語として現代中国語に移入された二字語基も少なくない。

また、蘭学資料と宣教師資料の新造語を比較した場合、語基の相違がそれぞれあるにせよ、一方であって他方がない語構成パターンがほとんど存在しない点も重要なポイントである。これは、和製漢語と中国語の語彙がよく混同される最大な要因だと思われる。

7.2 後部一字語基の日中対照

後部一字語基については、その出自の調べ方が前部二字語基とはかなり異なる。前部二字語基の場合には、漢籍などを検索すれば、その出自を突き止めることが可能であるが、後部一字語基となると、独立の一字語として調べようとすれば、漢籍では、ほとんど例外なく、それと対応する用例が見付かるであろう。ただし、これだけでは後部一字語基としての造語機能を立証することにはならない。結局、三字語の後部一字語基として使われる事例の有無によって出自の判断をするしかないが、一字語基は三字語の後部に位置しているだけに、検索条件の制約で用例の収集が困難になりがちである。本稿では、宣教師資料と蘭学資料の後部一字語基を照合した結果、表7のように、次の三つのパターンに分類することができた。

7.2.1 日中共通に見られる一字語基

「日中共通」とは、たとえば、「-度→(中)経緯度／(日)平行度」「-面→(中)地球面／(日)直線面」のように、蘭学資料と宣教師資料ではともに同一の後部一字語基が用いられている場合をいう。この種の後部一字語基(52語)は、一字語基全体の中で、蘭学資料の50.5%と宣教師資料の24.1%を占めており、前部二字語基に比べて、日中共通の割合が相当高くなっている。また、後部一字語基は、三字語での意味合いによって、実体のない抽象的な事物を表すもの(抽象系)と、実物が見える具体的な事物を表すもの(実物系)という2種類に大別することが可能であるが、「日中共通」の一字語基では、表7にあるように、抽象系のもの(57.7%)は実物系のもの(42.3%)に比べてやや数が多くなっている。

しかし、「日中共通」の一字語基にとって難しいのは、日中間の影響関係を明らかにすることである。この種の語のうち、たとえば、「顕微鏡、北極圏、三角形」における「-鏡、-圏、-形」のように、漢籍で後部一字語基としての用法が見付かったものに関しては、蘭学者達が漢籍にあった後部一字語基の用法を踏襲して三字語の造語に生かしたと考えられるが、一方、漢籍で三字語の用例が見付からない後部一字語基に関しては、蘭学資料での用例が早ければ、日本語起源と判断していいかが問題になる。

これについては、抽象系のものは実物系のものよりも状況が錯綜していて解明が難しい。たとえば、「-点」の後部一字語基としての用法を例に取って見ると、蘭学資料にある「集合点、投

着点, 反射点, 沸湯点, 飽和点」などに対して, 宣教師資料には「春分点, 凍氷点, 沸水点, 聚光点, 中心点, 重心点」などの語が見られる。蘭学資料の用例は、『窮理通』(1836), 『気海観瀾広義』(1850), 『理学提要』(1852) に用いられたものなので, 『六合叢談』(1857), 『西国天学源流』(1890), 『身理啓蒙』(1896), 『格致質学啓蒙』(1896) などから来た宣教師資料の用例に比べれば, 明らかに早い。しかし, 蘭学者達の造語が 19 世紀末までの宣教師資料に取り入れられた形跡がほとんどない状況の下で, 「-点」をめぐる日中間の借用関係がなかなか断言しにくいのが実情である。次の抽象系後部一字語基についても同じことがいえる³。

- 部 (中) 議事部 頭顱部 頭骨部 面骨部
- (日) 感染部 創傷部 膀胱部
- 度 (中) 折光度 斜角度 水沸度 経緯度 結水度
- (日) 平行度 寒温度
- 体 (中) 三棱体 容電体 牡線体 六面体 紀事体 玻璃体
- (日) 発光体 可燃体 流動体 凝固体 固形体 機性体 無機体 有機体
- 物 (中) 原質物 異性物 液質物 所載物 流質物 発光物 金質物 無生物
- (日) 刺衝物 機生物 可燃物 流動物 排泄物 酸化物 土質物 腐敗物
- 性 (中) 吸鉄性 滲濾性
- (日) 伝染性 分析性 感受性 可展性 流動性 流行性 遷延性 神経性
- 質 (中) 硬殻質 石灰質 硫磺質 蛋白質 胞殻質 白粉質
- (日) 可燃質 流動質 胆液質 地核質 火山質 神経質 石灰質 纖維質

7.2.2 日本資料のみに見られる一字語基

「日本資料のみ」とは, 宣教師資料には見られず, 蘭学資料のみにその用例が見付かったものである。この種の語には, 「-期」(定期, 行期), 「-派」(宗派, 流派), 「-腫」(浮腫, 水腫) のように, 漢籍には二字語の後語基としての用例しかなく, 三字語の後部一字語基としては蘭学資料においてはじめて登場したと思われるものが含まれている。ただし, 全体的に見て, たとえば, 「-症」の 56 例と「-翳」の 11 例はみな『眼科新書』(1815) に, 「-期」の 13 例はみな『扶氏経験遺訓』(1857) に集中しているというぐあいに, 用例の分布は 1-2 種の資料に偏っているものが多い。つまり, 後部一字語基の用法は, 広範囲に定着したというよりも, 著者の個人差や書物の専門分野に大きく左右されている段階にあると感ぜられる。

また, この種の語には, いくつかの動詞性一字語基が見られる。「-創」(角膜創, 眼瞼創), 「-動」(加運動, 減速動, 加速動), 「-計」(酸素計, 越歴計), 「-浴」(注射浴, 海水浴, 海塩浴, 硫黄浴, 微温浴, 温泉浴, 蒸気浴), 「-腫」(固結腫, 麦粒腫), 「-製」(金属製) などがそれである。これらの動詞性語基は, おそらく, 「きず(つける)→創」「うごき→動」「はかり→計」「あび(る)

³ 朱 (2011) では, 「-法, -力, -症, -証, -家, -学, -体, -性, -機, -質」などの後部一字語基を項目別にとりあげている。同論文の pp.15-22 を参照。

→浴」「はれ→腫」「つくり→製」のように、和語動詞の連体形から音読みの名詞性漢語語基になったものと思われるが、近代以前の中国語では、これらの一字語基は名詞性語基としても三字語の後部一字語基としても使えなかったため、上掲のような三字語は成り立たないはずである。しかし現代中国語では、「海水浴、温泉浴、蒸気浴」や「麦粒腫」がそのまま使われているし、「-計」の用例としては「温度計、体温計、血圧計」などがあげられる。このほか、次の後部一字語基も、現代日本語だけでなく、現代中国語にも用いられており、いずれ日中間の影響関係を解明する必要がある。

-期	発汗期	発生期	感染期	減退期	-素	南極素	北極素
-品	滋養品	人工品	植物品	清涼品	-派	振動派	
-系	神経系	血管系	太陽系	游星系	-液	分析液	鎮痛液 胃管液 粘稠液
-癌	眼瞼癌	眼球癌			-級	石炭級	

7.2.3 中国資料のみに見られる一字語基

「中国資料のみ」とは、蘭学資料には見られず、宣教師資料のみにその用例が見付かったものである。164語という数は、「日本資料のみ」の51語を遥かに超えて、中国資料にある後部一字語基の豊富さを表している。この種の語には、「-肌、-房、-舗、-針、-単、-桿、-蓋、-皮、-貨、-距、-路、-牌、-紋、-單、-擺、-叉、-廠、-櫂、-竿、-櫃、-行、-匠、-坑、-瓢、-鉗」のように、日本語では三字語の後部一字語基になりえないものが数多く含まれている。このような一字語基は、言うまでもなく、日本語とは関係なしに発生・発達してきたものなので、これらによって中国語では近代以前から、少なくとも宣教師資料において、2+1型三字語の造語機能がすでに備わっていたことが裏付けられる。一方、蘭学資料にある三字語は、語構成パターンの面で中国語からの影響を受けながらも、とくに後部一字語基の機能が強化され、同一語基による系列的・グループ的な三字語の創出へ進化したといえよう。

表7でもう一つ注目すべき点は、「中国資料のみ」の一字語基では、抽象系のものは約2割にとどまり、実物系のものが7割以上を占めているところである。これとは対照的に、「日本資料のみ」のほうでは抽象系のものが7割近く占めて、実物系のものは約3割となっている。日中間の相違は明らかである。以上の結果に基づいて日中双方の後部一字語基の特徴をまとめると、蘭学資料では、後部一字語基の種類が少なく、抽象系のものが比較的多いものに対して、宣教師資料では、後部一字語基の種類が多いわりには抽象系のものが少ないと言うことができる。

ちなみに、「中国資料のみ」の一字語基が、みな日本語の三字語の造語要素になれないというわけではない。この種の語が現代日本語でどう使われているかを調べてみると、約半数にあたる80余語は、蘭学資料にはなかったものの、次に例示したように現代日本語の一字語基として三字語を構成することができる。(次の例では、(中)は宣教師資料にある用例、(日)は現代日本語の三字語を示す)

- 会 (中) 三合会 格致会／(日) 研究会 忘年会
- 策 (中) 治安策／(日) 懐柔策 妥協策
- 士 (中) 地理士 化学士／(日) 税理士 看護師
- 税 (中) 進口税／(日) 消費税 住民税
- 族 (中) 食蟻族 錯齒族／(日) 暴走族 斜陽族
- 長 (中) 公局長／(日) 部門長 料理長
- 店 (中) 裁縫店 生意店／(日) 専門店 百貨店
- 費 (中) 寄信費／(日) 交通費 光熱費
- 票 (中) 護身票 過路票／(日) 住民票 反対票
- 率 (中) 視力率／(日) 成長率 就職率

8. まとめ

以上の考察で明らかになったことを次のように整理しておきたい。

(1) 宣教師資料と蘭学資料では、三字語内部の結合関係がほぼ対応しており、一方にあって他方ない結合関係は、語数の少ない少数のパターンを除いて、ほとんど存在しない。つまり、中日双方の三字語がほぼ同様の語構成をしていることが明らかになった。

(2) 宣教師資料の前部二字語基には、「火+輪(車), 津+液(管), 蛋+形(石)」のような「N+N 修飾関係」、および、「吸+鉄(石), 出+口(貨), 発+電(瓶)」のような「V+N 述客関係」の二字語基が比較的多く見られる。これに対して、蘭学資料では、「減+退(期), 刺+破(症), 飽+和(点)」のような「V+V 並列関係」の二字語基が多用される傾向がある。

(3) 宣教師資料では、「牙床骨, 活字版, 寄生枝, 救生船, 顕微鏡, 指南針」といった「3字出典あり」の語が抽出語全体の27.9%を占めており、蘭学資料の同種語の13.1%を大幅に上回っている。これによって、宣教師資料では、漢籍から直接多くの三字語が取り入れられていることがわかる。また、宣教師資料の後部一字語基には、「-肌, -房, -舗, -単, -桿, -蓋, -瓢, -鉗」のように、日本語では三字語の後部一字語基になりえないものが数多く含まれている。このような一字語基は、言うまでもなく、日本語と関係なしに発生・発達してきたものである。こうした事実を踏まえ、中国語では近代以前から、2+1型三字語の造語機能がすでに備わっていたとすることができる。一方、蘭学資料の三字語は、語構成の面で漢籍からの影響を受けながらも、とくに後部一字語基の機能が強化され、同一語基による系列的・グループ的な三字語の創出へ進化していったと考えられる。

(4) 宣教師資料の三字語では、後部一字語基の平均造語数が3.86語となっている。これは、蘭学資料の7語と比較すれば、日中間の顕著な差と言える。双方を比較してみると、蘭学資料では造語数の多い一字語基の比率が比較的高く、造語数の少ない一字語基の比率が相対的に低いに対して、宣教師資料では造語数の多い一字語基の比率が低く、造語数の少ない一字語基の比率が高くなっている。結局、宣教師資料の後部一字語基は、語基の種類が多くて平均造語数が低下しており、蘭学資料の後部一字語基は、比較的少ない種類でより多くの三字語を造り出している

ことになる。

(5) 後部一字語基は、三字語での意味合いによって、実体のない抽象的な事物を表すもの（抽象系）と、実物が見える具体的な事物を表すもの（実物系）の2種類に大別することが可能である。蘭学資料では、後部一字語基の種類が少なくて抽象系のものが比較的多い（表7参照）のに対して、宣教師資料では、後部一字語基の種類が多いわりには抽象系のものが少ないと言える。

参 照 文 献

森岡健二（1987）『語彙の形成』，現代語研究シリーズ第1巻。東京：明治書院。

野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』7(5): 44-55.

朱京偉（2011）「蘭学資料の三字漢語についての考察—明治期の三字漢語とのつながりを求めて—」『国語研プロジェクトレビュー』4: 1-25. 国立国語研究所。

Three-Chinese-character Words in Missionaries' Documents in China: Comparison with the Written Documents of Dutch Studies in Japan

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University

Invited Professor, Department of Linguistic Theory and Structure,
National Institute for Japanese Language and Linguistics [-2010.10]

Abstract

Zhu (2001) studied how words consisting of three Chinese characters were used in the written documents of Dutch studies in Japan in the 18th and 19th centuries. Building on this previous work, this paper analyzes the usage of three-Chinese-character words in thirteen kinds of documents published by missionaries in China from 1853 to 1896. By comparing the data in China with the corresponding data in the Dutch studies in Japan, this paper points out similarities and differences between Chinese and Japanese with respect to morphemes, word formation patterns, etc.

Key words: missionaries' documents in China, three-Chinese-character words, morpheme, word formation pattern